
そのままの君で

百合茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そのままの君で

【Nコード】

N9544A

【作者名】

百合茶

【あらすじ】

新しく入ったマネージャー。あっちゃんはタイプらしいけど、彼女は多分違う人目当て。俺にとっては別にどうでもいいんだけど…
想いに”偶然”なんてないから”共通”することは難しいよな…

（前書き）

前作『敗者の勝点』の一ヶ月前の内容となっています。ちなみに今回の主人公はテル。前作を読んでなくても問題はありませんが、前作も読む予定なら、前作を先にする方を勧めます。

俺とあっちゃんは幼稚園からの付き合いで、小学生の頃からずっとサッカーをやってきている。あっちゃんとは不思議なくらい共通点があつて、好きな物はカレーとサッカー、クラスは2年連続一緒だし、家は同じアパートで1階と2階の関係だ。ずっと一緒だからお互いの事はよく分かっている。

そんなある日

放課後、部室へ向かう途中に、あっちゃんが見慣れないマネージャーを発見した。

「テル、見ろよ。物凄い美人！」

「ん？マネージャーさん増えた？」

どう見ても3年生だよなあ。なんで今頃から…

「さっそくアピるぞ！」

「何をアピるんだよ？」

俺の問いが耳に入らなかつたのか、あっちゃんはもう歩き始めていて、俺は慌てて後を追った。

『谷口里美』さん。予想通り3年生。規定よりスカートが拳2つ分短い。

「俺の苗字と同じ『口』の字が！これはもしかや『運命』？」

『森口敦』と『谷口…さん』。『運命』と言うよりも『偶然』に近いと思うけど…。そんな事より、マネージャーこれで4人だぞ。

辞めた人も合わせたら6、7人…！

「テル？聞いてるか？これは絶対…」

「これは絶対誰かにコクるな。」

「え！？俺をさしおいて先客がいるのか！？」

そう言うとおっちゃんは大袈裟にため息をついた。でもすぐに前を

向く。どうやらターゲットを変えたらしい。辺りをぐるりと見回して、ぴたりと動きを止める。

「じゃあ、あっちの二人…」

指さした方向には、キーパーを洗いながら楽しそうにお喋りをするマネージャーがいた。

「またマネ。しかも姉さん^{アネ}。」

「テル、最後のは余計だぞ。…優しそうで俺はイイと思うけど?」

「俺はあんまり…」

「何だよ、それ。」

『何だよ、それ。』って言われてもなあ。

自分でも分かるような分からないような…。

上手く説明できない。皆一様に制服を着こなし、そこから伸びる手足は綺麗な白さで、曲げられたスカートのウエストは華奢に映る。

先輩たちと楽しそうに喋りながらも時々見せる女の子らしい仕草…。あっちゃんのように口を半開きにして眺めていてもいいのに、テレビを見ているような気分。

黙っていると、あっちゃんが俺の顔を覗き込だ。

「おーい、テル? 日本語分かるか? 『あんまり』って何だよ、あんまりって?」

「そのまんま。よく分からんけど、何かなあ…あんまり。」

「えゝ!? はつきりしろよ。大体、テルっていつも曖昧だよなあ?」

しつこい。いつもと変わらない、「冗談を言うような軽い感じのあっちゃんだけど、この時はなぜか鬱陶しく感じた。

「あっちゃん!」

「うん?」

「俺にだってよく分からん事くらいあるんだっ! あっちゃんこそ鈍感でずうずうしくて、名前の通り『厚かましい』んだよ!」

俺はそのままくると背中を向けた。あっちゃんは…何も言わない。そのまま収拾がつかなくなった俺は、

「先、行っというて。」

といい捨てて、元来た道を引き返した。

言い過ぎた。別にそこまで言うつもりじゃなかった。なあ、分かるだろ？ つい勢いに乗って口走っただけ…。

あっちゃんが黙ったままなんて、今までなかったから、どうすればいいか分からない。

あっちゃんとは不思議なくらい共通点があって、好きな物もクラスもアパートも同じだ。ずっと一緒だからお互いの事はよく分かっているつもりだった。でも、実際は分からない事もある。分かっても出来ない事もある。”共通”なんて”偶然”とそんなに変わらないものだ。それを引き合いに出して、分かったつもりになっていただけ…。

あっちゃんになんで苛立ったのか分からないし、確かにちよつと鈍感だけど『厚かましい』なんて、思った事もない。あっちゃんは俺の言った事全てを真に受けてはいないだろうか。

気付いたら教室の前まで来ていた。ここでもあっちゃんと俺は同じ教室に席を並べている。

ガラッ

引き戸独特の音がやけに勢いよく響く。奥の方で人影が動いた。

「梨乃…。まだ居たのか？」

クラスメイトの石井梨乃が、電気もつけずに窓際の机に座って外を見ていた。俺が中へ入ってきてても風に揺れる髪以外、そのままの体勢でグラウンドを眺めている。

「なあ…」

「部活は？」

俺が問うより先に梨乃が鋭く訊いた。

「ああ…忘れ物取りにきただけ。」

とつさにでた嘘。そう、やろうとも思わない国語の宿題を取りにきただけ…。

「それよりさ、梨乃は何見てたんだ？」

これ以上訊かれたくなくて、話題を切り変える。

「あのね…」

梨乃は呟きながらまたグラウンドに視線を戻した。

「あたし、マネージャーやろうかなーって思ってるの。」

「じゃあ、部活は…？」

「辞める。」

「なんで？」

俺は梨乃の隣まで来ていた。

「なんで、なんで辞めるんだよ？」

” 夏季大会は先輩達と一緒にベスト4入りしたい。” って言つたの、一体誰だよ？” やりたい事をやらないと学校来る意味ないよ。

” と言つて、テスト休みでもこっそり自主練していた事も見ていたんだぜ。それを捨ててまでやりたい事かよ？

頭の中で沸々と生まれる怒りのような焦りが、疑問詞となって駆け巡る。

バレーをやつてない梨乃は梨乃じゃない。

「あたし、もう駄目なんだよ。怪我してるもん。」

そう言つて、地面から宙に浮いた左足に目を落とした。

先週、捻挫したと言う足首には湿布と包帯が巻かれている。

「それに…」

梨乃が別の理由を語るように、グラウンドに向かってため息を洩らす。

「マネージャーなんか、やるな。」

とつさにそう言っていた。

「そんなの梨乃のキャラじゃないだろ。マネージャーってのは、タイム計ったりキーパー作ったり…」

語気に熱が入っている事に気が付いて、何でもないように宙に目を

向けながら冗談がましく付け加える。

「あー…キーパーってゴールキーパーじゃねえぞ？梨乃がゴール守ったら佐川の出番がなくなるからな。」

しかし梨乃は笑うどころか驚いたようだった。口を『え？』の形にしたまま一瞬沈黙が流れた。

「なんで…サッカー部って分かったの？マネージャーなら野球もバスケも募集してるのに…。」

「それは…。」

言われてみればそうだけれど、心の奥では知っていた。梨乃が語るうとした別の理由も、その言葉を無意識に遮った訳も分かっている。あの時俺は焦った。前から勘付いていた事を事実と認めるのが嫌だった。あっちゃんが興味を持って、俺が関心のない”谷口さん”。

梨乃が彼女と同じものになるのを心の奥で拒んでいる…。

「とにかく、マネージャーなんて梨乃には無理だよ。」

梨乃の顔がさつと曇る。

…違う。そんな意味じゃない！

『いつも曖昧なんだよ』と言った、あっちゃんの顔が思い浮かぶ。

曖昧だから伝わらない。真っ直ぐ伝えたいけどそれができなくて、いつも空回り。面と向かうと言えない一言…。

「どんなに傍にいても、良く見せようとしたら、かえって何にも分かってもらえないもんだぜ。」

梨乃があっちゃんが好きな事くらい分かっている。でもあっちゃんは気付いてない。想いに”偶然”なんてないから”共通”することは難しい…。だからこそ丁寧に伝えたい。そのままに伝えたい。

「足、さっさと治して復帰しろよ。バレーやってるのが梨乃なんだし。マネージャーなんかやったら、俺…諦めるからな。」

「何を？」

息を吸って一瞬肺に留める。胸の奥から生まれる熱で、空気は温まっつてゆっくり出ていった。

「梨乃の事。」

梨乃の頬がさつと赤く染まった。

「俺はまだ諦めたくない。梨乃が誰を想おうとな。」

窓から風が入って、梨乃の香りを運んできた。いつも傍で感じてた
レモンライムの香り。

「いつから知ってたの？」

梨乃の想い人があっちゃんだと気付いたのはいつだったろうか…。

「そうだなあ。梨乃を好きになった時には…。まあ、小学校時代からだな。」

「一途だね。」

「そっちな。」

恥ずかしくて照れ隠しに笑う。何だかおかしくて、くすぐったくて。

「テル！」

聞き慣れた声がして振り返るとあっちゃんがいた。

「何だよお。怒ってると思ったら楽しそうに…。」

あっちゃんがぐいっと袖を引っ張る。

「パスの相手がいないと部活できねえだろ。ほら、テル行くぞ！」

「お、おう！梨乃も部活行けよ？」

につこり笑って頷くのを確認して教室を出た。

そのままの自分でいたいから、俺は今日もボールを追う。

（後書き）

三角関係になってしまいましたね。

真っ直ぐ伝えたい、そのままの想いを伝えたいなら、自分を飾る必要なんてない。と言うこと、どんなに共通点があっても、お互い分らない事は沢山ある。ということ。あっちゃんとテル（梨乃もか？）のストーリーはまだまが終らないのかもしれないかもしれません。最後までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9544a/>

そのままの君で

2010年10月12日04時06分発行